

「身体多様性」に着目した大学体育授業 の可能性：

アダプテッドスポーツワーク・ショップ における学びの検討

The Potential of University Physical Education
Classes as Liberal Arts Education Focusing on
'Human Body Diversity':
An Examination of Learning in an Adapted Sports
Workshop

荒 牧 亜 衣

I. はじめに

本稿の目的は、アダプテッドスポーツ・ワークショップ（Adapted Sports Workshop、以下 ASW とする）における学びの検討を通じて、「身体多様性」に着目した大学体育授業の可能性を明らかにすることにある。ASW とは、本学総合科目「心と体」実践セクションの授業として、2011 年から開講している演習形式（2 単位）の授業である。

体育・スポーツのユニバーサルデザインの実現に向けて基礎的研究に取り組んだ田中（2016a）は、競技スポーツおよび教科体育では、技能習得や勝利を過度に求めるのではなく、それ以上の価値を見出すことが指摘されていることを示した。その上で、Eichberg らの sport for all に関する研究並びに「デモクラシー」の概念を引用し¹、新しいスポーツの見方に対し、「身体多様性」を加えること

¹ 田中（2016a）は、Eichberg らの先行研究について、スポーツの新たなあり方について考察した示唆的なものであると述べている。彼らの提唱する bodily democracy という独自の概念は、sport for all の理念を「エリートスポーツの、ある低いレベルへの単なるコピーではな」く、「人々が彼ら自身のシステムに従って、プレイし、自己決定し、他者に出会い、

を提案している²。

上述したようにASWは、本学における総合科目である。競技スポーツあるいは教科体育の文脈とは異なる、いわゆる大学体育の延長線上にあるものとしても解釈できる³。しかしながら、スポーツを対象に、あるいはスポーツを通して「身体多様性」にアプローチするという視点は、多面的な総合知と実践力を身につけることをねらいとした本学の総合科目としての位置づけを鑑みれば特筆すべきである。すなわち、スポーツを対象とすることによって人間の「身体多様性」そのものが具体化されるだけでなく、「身体多様性」に関する考え方や価値観、それらにかかわる課題も象徴的に示すことが可能となるからである。

さらに、田中（2016a）は、こうした問題意識を背景に、ユニバーサリティの実現可能性に言及しながら、方法として「開かれたスポーツ」をデザインすることをねらいとした大学体育授業の展開についても述べている。ここでいう「開かれたスポーツ」とは、ルールや形式が固定された「閉じられたスポーツ」と対をなすものである。田中（2016a）は、参加者の身体に応じて変化することができる「開かれたスポーツ」を、「今—ここ」にいる参加者によって作り上げるという方法の可能性について言及している⁴。具体的には、次のような方法である。

「身体多様性」への理解をもとに「目隠しをするスポーツ」をデザインするほか、シッティングバレーボールの体験によって、座って動くことができる「可能性」を理解し、その理解をもとに「座ってするスポーツ」をデザインする、などの活動も有効であろう。これらの実践においては、スポーツをデザインす

他者を認める」ことであると規定し直す試みであり、近代スポーツと異なる、それと併存し得るもう一つの在り方をしたスポーツを生み出す必要性を示唆していると指摘する。田中（2016a）体育・スポーツのユニバーサルデザインに関する基礎的研究、武蔵大学人文学会雑誌 48(1), pp.283(38)-pp.282(39)

² 田中愛（2016a）同上書，pp.283(38)-282(39)。

³ たとえば、森田らは、大学体育について「カリキュラムに組み込まれた体育・スポーツ科目」であり、「大学体育」「教養体育」「正課体育」と従来称されてきたものを考察対象としている。森田啓，引原 有輝，若林斉，金田晃一，西林賢武（2016）学士課程教育における大学体育：その可能性と再定義，体育学研究 61(1), p.225.

⁴ 田中（2016a）同上書，p.276(45)。

るとともに、参加者の身体もそれに応じて新たな能力を得ていく、ということが目指される⁵。

上記のような「開かれたスポーツ」を作り上げる方法は、「身体多様性」に関する理解を前提に、ルールや用具の変性を確認することによって、スポーツの多様性を体験する試みであると考えられる。さらに田中（2016a）は、上記の“デザイン”の過程における参加者の学びについて、次のように指摘する。

この“デザイン”の過程で参加者は、スポーツ実践に必要となる「道具」や「空間」、「動き方の種類」の3つに関して、新しいものを作ろうと試みる。その際になかなかうまく行かない、その試行錯誤の中で、よりふさわしい道具はなにか、どの広さが一番面白いのか、どんな動きが可能かということ、まさに「身体で」考え工夫することとなる。この、なるべく多くの身体状況の人たちが参加できるように工夫している活動からは、先行研究に示した Eichberg らの言うデモクラシーの可能性を見ることができる。そういった意味で、単なる既存のアダプテッド・スポーツを体験するだけでなく、自分たちの工夫で種目を作り上げることには、「身体多様性」に関して、そしてスポーツの多様性に関して一定の学びが生じるのだと考えられる⁶。

人間の身体は、個別的で多様である。したがって、この“デザイン”の過程で参加者は、想定される個人各々の身体状況を理解するだけでなく、スポーツのルールに求められる機能や制度的枠組みに関する問いなおしも要求されることがわかる。「開かれたスポーツ」をデザインするという方法を通じて、参加者は「身体多様性」を尊重することの意味や「スポーツの多様性」を保障することのむずかしさに関する学びをえる可能性もある。

⁵ 田中（2016a）同上書、p.276(45)。

⁶ 田中（2016a）同上書、pp.276(45)-pp.275(46)

本稿では、田中（2016a）の研究成果を参照しながら、本学における ASW の実践と学びに関する検討を通じて、大学体育授業としての可能性を論じることを試みる。

Ⅱ．授業計画と実施内容

1. 本授業の概要

シラバスで示した本授業の概要の要点は、表1の通りである。

表1 本授業の概要（一部抜粋）

①	アダプテッドスポーツが生まれた背景について学ぶ
②	オリンピックやパラリンピックで実施されている競技スポーツのルールについて再考する
③	上記①②を踏まえ、グループに分かれて新しいスポーツをデザイン、考案する

表1の①については、アダプテッドスポーツという概念の理解を目的として、本授業における「スポーツ」と「アダプテッド」に関する定義を確認した。アダプテッドスポーツは、既存のスポーツ概念にはおさまらないと考えられるものを想定することによって登場したといわれている。個人の状況にあわせて既存のスポーツ・ルールや使用する用具を修正、改変することによってその特徴があることがわかる。したがって、アダプテッドスポーツという概念は、田中（2016b）も指摘するように、障がいの有無を問わず多くの人が参加できる点が強調され、注目されはじめたと考えられる⁷。講義では、表1の①②に関して、アダプテッドスポーツという概念が誕生した背景とその理念、競技スポーツの多種多様な現状を紹介した上で、オリンピック競技大会とパラリンピック競技大会を越境するアスリートの事例や競技スポーツにおける性別二元制に関する事例について解説した。

また、表1の②については、特に、パラリンピック競技大会の正式種目である

⁷ 田中愛（2016b）スポーツ身体論の現象学的考察：アダプテッド・スポーツ実践に生じる「意味」としての身体に着目して、体育スポーツ哲学研究 38(1),p.39.

「身体の多様性」に着目した大学体育授業の可能性：アダプテッドスポーツワーク・ショップにおける学びの検討 荒牧 亜衣

シッティングバレーボールを取り上げ、体験する活動を行った。その他、ゴールボールやブラインドサッカー、車いすバスケットボールに関する体験活動も行い、実践を通して講義での学びを深めた。その後、表1の③については、授業担当者が事前実施したアンケート結果を参考に指定したグループに分かれて、新しいスポーツをデザイン、考案する活動に取り組んだ。

2. 授業計画と実施内容の概要

授業計画と実施内容は、表2の通りである。第1回目から3回目の授業は、教室にて講義を実施する計画を立てた。スポーツの多様性に着目しながら「身体の多様性」への理解を促すために、オリンピック競技大会とパラリンピック競技大会に関する内容及び、現在の競技スポーツにおける性別二元制に関する内容を取り扱った。事例紹介では、競技映像等動画教材を積極的に活用した。また、授業時間内にペアワークやグループワークを導入し、講義内容について学生同士が議論する機会も設けた。

第4回目から7回目の授業は、体育館にて実技を行った。前半は、授業担当者の専門種目であるバレーボールを中心に取り上げ、上述した田中（2016）の指摘を参考に「道具」や「空間」、「動き方の種類」に着目した活動を実施した。シッティングとスタンディングによるバレーボールの動き方の対比だけでなく、ネットの高さやボールの変更による変化を体験する時間を設けた。これらの活動は、授業担当者が毎回異なるグループを指定して行い、5名程の単位で学生同士が交流し、主体的な学びを促す環境づくりにつとめた。各グループでルールの修正や変更を行ったゲーム活動をほかのグループとともに実践する活動も取り入れ、スポーツ・ルールの基本的な機能を学び、対戦相手のチームと合意形成を図りながらゲーム活動も実施した。

そのほか、車いすやアイマスクを用いた活動も受講したすべての学生が体験できるよう授業を計画した。ブラインドサッカーやゴールボールのルールを参照しながら、各グループにおいて「道具」、「空間」、「動き方の種類」に着目したゲームを提案、お互いに体験する活動も実施した。

第7回目から11回目の授業では、事前アンケートによる個別の意見徴収の結

果を踏まえ、授業担当者が指定した3、4名の単位でグループワークを行った。グループワークは、毎回メンバーの役割分担を変えながら実施した。授業担当者が資料を用いて示した手順に基づき、リーダーを中心に行い、記録係がワークシートに記入する手続きをとった。グループ内で問題意識を共有した後、ルール作成

表2 本授業の授業計画と実施内容

	授業計画	実施内容
1	ガイダンス アダプテッドスポーツはなぜ生まれたか？（講義）	・本授業におけるスポーツの定義 ・アダプテッドスポーツ誕生の背景とその理念
2	オリンピック競技大会とパラリンピック競技大会の境界とは？（講義）	・オリンピック競技大会とパラリンピック競技大会のそれぞれのはじまり、理念 ・越境するアスリート（事例紹介） ・競技の公平性に関する議論
3	スポーツにおける性別二元制の検討（講義）	・近代スポーツの発展とジェンダー ・性別二元制に基づく競技スポーツ制度の限界 ・事例紹介
4	シッティングバレーボールの体験（実技）	・座位で動く ・座位でボールを扱う ・ネットをはさんでプレーする
5	スポーツ・ルールの再考：ボールやネットの高さを変える（実技）	・ルールを提案、修正しながらバレーボールをシッティング及びスタンディングで実施 ・ネットの高低やボール（ふうせん、ソフトバレーボール等）を変更したゲームの体験
6	ブラインドスポーツ、車いすスポーツの体験（実技）	・アイマスクを使用した活動 ・ドリブル、PK戦 ・車いす操作の体験
7	ブラインドスポーツの体験（実技） グループワーク1	・ゴールボール、ブラインドサッカーのルールを修正、変更したゲームを実施 ・グループメンバーとの問題意識の共有
8	グループワーク2	・基本方針とコンセプトの決定 ・基本的なルールの作成
9	グループワーク3	・ルールの確認 ・小グループでの体験会1
10	グループワーク4	・ルールの修正 ・小グループでの体験2
11	グループワーク5	・発表会のリハーサル ・ルールブックとシナリオの作成
12	発表会及び体験会	・各グループの成果発表と体験会
13	発表会及び体験会	・各グループの成果発表と体験会 ・本授業のまとめ

「身体多様性」に着目した大学体育授業の可能性：アダプテッドスポーツワーク・ショップにおける学びの検討 荒牧 亜衣

とトライアルを繰り返しながらスポーツをデザインする活動を行い、その成果を発表会で披露した。

第12回目から13回目の授業で実施した発表会は、各グループ15分単位で実施した。考案したスポーツのコンセプトやルールの説明をした上で、体験会を行う形式をとった。事前に各グループから提出されたルールブックとシナリオを資料としてオンライン上で配布し、学生はそれらを確認した上で授業に参加した。発表会のフィードバックについては、体験会の終了後に学生同士のやりとりの時間を設けるとともに、授業終了後に提出されたコメントシートの内容を学生が確認できるようオンライン上で資料として公開した。

さらに、レポートとしては、各グループで考案したスポーツを普及するためのハンドブック作成と本授業での学びについて自らの意見を述べる課題を出題した。

Ⅲ. 本授業の学びに関する考察

本節では、学生のレポートの記述内容を対象に「身体多様性」に着目した本授業の学びについて考察する⁸。分析の対象とするレポートは、授業期間中に提出し、最終授業終了後に学生が提出したものである。レポートでは「本授業の感想を踏まえ、授業を通して学んだことを3つ挙げて説明してください。また、本授業での学習成果を今後どのような場面で発揮できると考えられるか、あなたの意見を述べてください。」という課題を出題した。記述内容については、主題分析法(thematic analysis)を用いてコード化とカテゴリ化を行った。その結果、「スポーツに関する新たな気づきと学び」「“デザイン”の過程における学び」の2つのテーマと6つのサブテーマが抽出された。それぞれ抽出したサブテーマとカテゴリーは、表3、表4の通りである。

⁸ 本稿では、筆者が授業担当者として実施した2022年度及び2023年度のASWを受講した学生のレポートを考察の対象としている。学生には、当該授業で提出されたコメントシート及びレポート内容については、授業内で個人が特定されない形で共有すること、また、研究に使用すること、研究への不同意は不利益を被らないことを口頭によって説明し、同意を得た。

表3 スポーツに関する新たな気づきと学び

A. 競技スポーツに関する学び	a. 競技スポーツに関する知識 b. 競技スポーツの価値や可能性 c. 競技スポーツの多様性 d. 競技スポーツのおもしろさ e. 競技スポーツにおけるジェンダー問題 f. 競技スポーツが有する不平等性
B. 障がい者スポーツに関する学び	a. 障がい者スポーツに関する知識 b. 障がい者スポーツの卓越性 c. 障がい者スポーツの可能性 d. クラシフィケーション e. 障がい者スポーツのおもしろさ
C. アダプテッドスポーツに関する学び	a. アダプテッドスポーツの理念 b. アダプテッドスポーツの意義や魅力 c. ルールの機能と使用する用具の役割

「スポーツに関する新たな気づきと学び」は、講義や実技の授業により知識を修得し、新たな発見があったことやスポーツへの理解を深めたことに関する内容である。サブテーマは「A. 競技スポーツに関する学び」「B. 障がい者スポーツに関する学び」「C. アダプテッドスポーツに関する学び」が含まれる。

例えば、スポーツそのものが多様化していること、障がい者スポーツにおける競技志向の高まり、公平な競争を保障することのむずかしさに関する記述が挙げられる。現在の競技スポーツがかかえる課題やスポーツ・ルールの不完全さを知ることにより、アダプテッドスポーツの理念についての理解も深化したことが推察される。学生は、これらの学びを通して「身体の多様性」という視点から既存のスポーツを俯瞰し、これまで経験してきたスポーツがけして完璧なものでなく、むしろ多様性を尊重することが困難な状況にあることを認識したと考えられる。学生にとって本授業の学びは、田中（2016a）が指摘するところの「閉じられたスポーツ」の限界と、「開かれたスポーツ」のポテンシャルを確認する場となった可能性がある。

表4 “デザイン”の過程における学び

D. スポーツをデザインすることによる学び	a. 試行錯誤 b. 他者からの気づき c. 創造力 d. 思考力 e. 計画性
E. 他者理解に関する気づきと学び	a. 他者を尊重することのむずかしさ b. 多角的な視点で考えること c. 客観性と共感
F. 他者との協働による学び	a. コミュニケーション b. チームワーク c. リーダーシップと主体性

「“デザイン”の過程における学び」は、本授業の第7回目以降に実施した新しいスポーツを考案する活動を通じた学びに関する内容である。サブテーマには「D. スポーツをデザインすることによる学び」「E. 他者理解に関する気づきと学び」「F. 他者との協働による学び」が含まれた。

「D. スポーツをデザインすることの学び」については、新しいスポーツを考案するむずかしさを体験したことによる学びが強調される傾向にあった。グループのメンバーとともに、トライアンドエラーを繰り返しながら、対話の中で新たな気づきを得ていたことが推察される。また、グループ内における問題意識の共有、発案から発表会での提案までのプロセスを通して、既存のスポーツ・ルールへの理解も深めていったようである。オリジナルなスポーツを構想する活動は、学生にとって初めての経験であり、創造力や思考力、計画性を育む場としても機能した可能性がある。むずかしい課題に取り組んだことによる達成感に関する記述も散見された。

「E. 他者理解に関する気づきと学び」は、他者を尊重することのむずかしさや多角的な視点で考えることの大切さに関するものである。ここでいう他者は、グループメンバーだけでなく、「身体多様性」という視点から浮き彫りになる身体状況の異なる他者も意味している。自分とは食いちがう意見を述べる人や反対の行動をする人、あるいは身体状況の異なる人等、他者を理解した上でもなお、他者を尊重することは容易ではない現実を知ったことに関する記述も確認でき

た。その上で、多面的な視点で物事を考える必要性、客観性のメリットや共感の意味についても言及するものをあつた。

「F. 他者との協働による学び」は、本授業で実施したグループワークを通じた学びに関する内容である。本授業の特徴は、新たなスポーツの見方として「身体多様性」に着目したことにあつた。この方法により、スポーツを“デザイン”する活動において学生は、他者と協働する意味について再考し、それらの過程でグループ内における自身の役割についても判断しながら授業に取り組んでいたことが推測される。コミュニケーションやチームワークに関する学びだけでなく、状況に応じて自分ができることについて逡巡しながらも、責任を果そうと努める記述内容も見受けられた。

IV. おわりに

本稿の目的は、ASWにおける実践と学びの検討を通じて、「身体多様性」に着目した大学体育授業の可能性を明らかにすることであつた。「身体多様性」に注目して、新たなスポーツを“デザイン”する活動の中で学生は、田中（2016a）が指摘したように、スポーツ実践に必要となる「道具」や「空間」、「動き方の種類」の3つに関して、新しいものを作ろうと試みた。試行錯誤を繰り返し、まさに「身体で」考え、工夫するプロセスを体験していたと考えられる。学生の学びは、ASWの受講を通じて獲得した「開かれたスポーツ」という視点をういて「閉じられたスポーツ」による身体性を見つめなおし、再認識することからはじまっていたと推察できる。

また、学生は、非日常としての既存のスポーツの問題とその問題の解決が困難である現在の状況を学びながら、日常において多様性を尊重することのむずかしさをあらためて確認していくことになった。人間の身体を通して既存のスポーツの問題を把握することは、現実社会の問題をより具体的に理解することを促したと考えられる。このことは、スポーツとは何かという本質的な問いに加え、人間の身体に関する普遍的な問いへ展開するものであったと考えられる。

さらに、新たなスポーツを“デザイン”することは、スポーツする身体を通じて、

他者を理解し、他者と協働することに関する学びももたらしたと考えられる。「身体の多様性」という視点をを用いて、自身が経験してきた既存のスポーツを問いなおすことによって、学生が現実社会の課題にもおおいを巡らし、想像力を働かせながら学びを深めていったことも示唆される。

こうした学びのありようは、1991年の大学設置基準の改訂以降、その意義や存在が批判的検討の対象となっている大学体育授業の可能性を考える上でも注目に値する。例えば、大学における「体育実技」をその教養教育的意義から論じてきた徳山（2011）は、身体の物質的側面のみを捉え健康増進、あるいは体力強化を図るものだけではなく、「体育実技」において＜経験知＞に焦点をあて、自らが創りだしている秩序について学ぶことを論じている⁹。徳山（2011）はまた、大学の教養教育の理念は人間形成に集約されることも述べる¹⁰。徳山（2011）を参照するならば、大学体育授業はスポーツする身体を通して、人間形成を目指すものとしても考えられる。本学におけるASWの学びの検討から、「身体の多様性」に着目した大学体育授業は、この立場からも可能性を有していると考えられるのではないだろうか。

⁹ 徳山郁夫（2011）大学教養教育についての事例的研究：「経験を考える」の授業構想について．千葉大学教育学部研究紀要 59, pp.159.

¹⁰ 徳山（2011）は、人間形成についても解釈が分かれるとも言及している。徳山郁夫（2011）同上書、pp.159.

